

佐土原キリスト教会 2023年9月24日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章17～20節

説教題：神の言葉、素晴らしきギフト

「福音書」の律法学者は、今はどうなっているのか疑問に思っていたのですが、最近、19世紀のあるユダヤ人の学者のお父さんが「律法学者だった」と書いてある記事をインターネットで見つけて、「律法学者」という言葉が現代まで生きていたのだなと思ったことでした。

今朝は、いきなり内容に入ります。「山上の説教」は106節に亘る長い説教です。しかしイエスはこの説教を、ある時、一度に為さったのではなく、色々な機会に為さった教えを、マタイがここにまとめて提示したのだらうと言われます。なぜそうしたのか。初代教会の中に「もう律法の時代は終わったのだ。今は、そんなことは気にせず自由に生きて良いのだ。信仰が大切なことから、生活のあり方のことまでやかましく言うな」、そういうキリスト者が現れたらしいのです。マタイは「それは間違いだ」と言いたかったのです。キリスト者は、ただで天の御国を与えて下さった神の恵みに応答して行くのです。感謝があるからイエス様の言葉に応答して行くのです。そして、そのことを通して私達自身が「神の民」として育てられて行くのです。私達は育てられて行かなければならない。それが天に向かう地上の巡礼の旅の目的です。CS ルイスは言いました。「今の世において、神の御心に従う生き方、神の御心に適う行いをした時にだけ身につけることができるような品性を、少なくともそのような品性の芽を持っていなければ、来るべき世がどんなに素晴らしい環境であつても、私達は、神が備えられた深い、強烈な幸福を十分に味わうことができないだろう」。私達は、主に喜ばれるように成長して行くべきだと思います。それが本当に自由になる秘訣かも知れません。その意味でマタイは、今朝の箇所も、ここに置いたのでしょう。今朝の箇所は「新共同訳」が「律法について」と小見出しをつけている箇所ですが、『旧約律法』と私達の関係』についても1つの理解を与える意義深い箇所です。3つのことを申し上げます。

1：「律法」について

イエスは「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです」(17)と言われました。そもそも「律法」とはどのようなものなんでしょうか。

これは北米の福音派の学者から学んだことですが…。「旧約の律法—(『モーセ五書』)—は何のために与えられたのか。どのような役割を果たしたのか」。旧約の律法は、紀元前1400年頃、イスラエルがエジプトから脱出する「出エジプト」において与えられます。エジプトから脱出するまでイスラエルは何世代にも亘って奴隷でした。奴隷根性に縛り付けられていたのです。長年、奴隷のような状態に置かれていた人を見た人から聞いた話です。その人達は、誰かが手を振り上げるだけで、反射的にぶたれないように両手で頭を抱えて屈んだというのです。そうせざるを得ない暮らしをして来たのです。イスラエルもそうだった、奴隷だったのです。その彼らを、奴隷から「神の民」に変えて行くのが「旧約聖書の律法」だったのです。その意味で「律法」は、彼らが「神の民」として立つことが出来るように、神が与えて下さった「ギフト(良き物)」でした。そして実際に彼らは、律法に習い従うことによって「神の民」に育てられて行く、「神の民」に成って行くのです。神が与えた「律法」とは、そのように良いものだったのです。「預言者」と言われる書物も、神を離れて墮落しようとする民を「神の民」として守り、導き、その歩む道を整えようとする言葉です。「神の民」を導くためのギフトなのです。だから「詩篇」の詩人も「律法」を喜んでいましたし、私達が「旧約律法」を読んでも、心のどこかが癒されるような思いになります。

しかし、イエス様が活動された当時、「律法」という時には4つの意味がありました。1つは「十戒」です。2番目に「モーセ五書—(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の5つの本)」です。3番目に「旧約聖書全体」を指して「律法」と呼んだ。しかし4番目に「聖書には書かれていない、口頭で伝えられて来た教え」を「律法」と呼びました。律法学者が決めた決まり—(「律法」の細則等)

一です。そして律法学者やパリサイ人が「律法」という場合には、4番目の「決まり」を指して言う場合が多かったのです。この後の箇所、イエスが言われます。「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのをあなたがたは聞いています」(マタイ 5:43)。「聞いています」とある通り、パリサイ人や律法学者が「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め」と口頭で教えていたのです。ところが「旧約聖書」のどこにも「敵を憎め」という言葉は無い。彼らが勝手に作った「決まり」なのです。イスラエルは何度も外国から占領されました。人々には「外国の隣人を愛する」というより「外国人を憎む」という感情の方がびったり来るのです。だから「隣人を愛しなさい」という神の教えに、「自分の敵は憎め」という教えを付け足して「決まり」を作ったのです。しかしそうすることによって「隣人を愛しなさい」、「愛に生きなさい」という神の意図を無視するわけです。だからイエスは、21節以降で「しかし私は言います…」と、人間が作った「決まり」の誤りを指摘して、神が「律法」を与えたその本質に、神の意図に、目を向けさせようとされたのです。いずれにしても、本来「律法」とは、律法学者の「決まり」ではありません。「旧約聖書」にある「神が与えた戒め」であり、様々な「教え」です。それは、人々を良く育てるものでした。そんな中で、イエス様が「わたしは律法や預言者を成就するために来た」とは、どういうことでしょうか。

イエス様は、ある時、「律法」の専門家から質問を受けます。「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか」(マタイ 22:37)。イエスは答えられます。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』…これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも…同じようにたいせつです」(マタイ 22:37~39)。「律法」の一番大切な精神は、神を愛し、人を愛することなのです。「創世記 26:5」にこうあります。「これはアブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの戒めと命令とおきてとおしえを守ったからである」(創世記 26:5)。これは「『律法』を守った」ということが言われているのです。しかしアブラハムの時代には、また「律法」は与えられていないのです。しかし、信仰に生き、神を愛して生きたアブラハムを、「『律法』を守った」と褒めておられるのです。つまり、神を愛すること、愛に生きること、それが何より大切な「律法」の精神だということです。イエス様は、この地上に愛すること、それを持って来て下さったのです。神を愛すること、人を愛すること、それを持って来て下さり、人々に教え、ご自身も神への愛、人への愛に生き抜かれ、そのようにして「神の『律法』」を完成された、成就されたのです。(もちろん、「旧約」の「救い主の到来の約束」を成就されたということもありますが…)。使徒パウロは後に言いました。「愛は律法を全うします」(ローマ 13:10)。パリサイ人や律法学者が一生懸命だった「律法」は、神の口から出た戒めではなかったし、神を愛し、人を愛し、人を生かすものではなかったのです。

2: 律法を守ることにについて

次にイエスは言われました。「戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます」(5:19)。聖書を読むと、イエス様は、「律法」に対して自由に振舞っておられます。例えばイエス様は、安息日に自由に病人を癒されました。それで指導者達の反感を買うのです。しかし、イエス様が「無視」されたのは、申し上げたような人間が作った決まりです。「聖書」にある神が与えられた戒めには、きちんと従われたのです。では「聖書」には、613の戒めがあると言われます。(「しななければならないこと」が248、「してはならないこと」が365です)。イエス様は、私達にも「それをしっかり守れ」と言われるのでしょうか。

これも北米の福音派の学者から学んだことですが…。「旧約の律法」には3つの法があります。「古代イスラエル市民法、古代イスラエル儀式法、道徳法」の3つです。その学者は言います。「新約のキリスト者にとって、旧約の律法は、それが新約聖書に更新されているものでなければ、それはクリスチャンを縛らない」。「イスラエル市民法、イスラエルの儀式法、道徳法」の中で、明らかに「新約聖書」の中に更新されているのは「道徳法」です。どのような形で更新されているかということ、イエス

が「山上の説教」を通して「律法」の本来の意味をより深く提示して下さったのです。イエスは、この後で「…とあなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います…」(マタイ 5:21～22)と、「山上の説教」の中に「旧約律法」の本質を更新して行かれます。ですから19節で「戒めのうち最も小さいものの一つでも…それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます」(5:19)と言われる時、私達は「山上の説教」に代表される「新約の教え」を考えれば良い、「山上の説教」に向かえば良いのです。{「旧約聖書(旧約律法)」が、オリジナルとして大事であることは依然変わりません。ただ私達には更新された「律法」—(「新約聖書」、あるいは「山上の説教」)—があるのです}。

私は「救いとは何か」ということを考えるのです。(ここでいう「救い」とは、『具体的な状況から救われる』という意味の救いですが…)。救いの1つの形は、その人が変えられることではないでしょうか。良く言います。「変えられないのは他人と過去、変えられるのは自分と将来」。自分が変われば、相手が変わり、そして状況が変わることがあるのです。ある牧師の家の隣にポチという犬が飼われていました。ポチは夜も昼も吠えます。牧師は眠れない。極度の睡眠不足になって、ポチに腹を立て、憎しみまで湧いて来ました。ポチの前を通る時には、歯をむいて睨みつけた。ポチも吠え返しました。睡眠不足と苛立ちは続き、いよいよ限界に達した時、牧師は1つの話を思い出しました。「ある人が庭に芝生を植えた。ところが芝生と一緒にタンポポが生えて来ました。抜いても、抜いても生えて来る。専門家に相談したら、専門家が言いました。『どうしてもタンポポを退治できないのであれば、あなたはタンポポを愛することを学んだらよいでしょう』。彼は思います。「そうだ、ポチを退治できないのであれば、ポチを愛することを学ぼう」。ポチを見たらニコッと笑いかけることを始めた。それでも最初は吠えていたポチが、やがて様子が変わって来て、ついには尻尾を振りながら近づいて来るようになったという話です。

「自分が変わることで状況は変わる」ことがあるのです。そこに「救い」が生まれることがあるのです。ということは、「私達が育てられる、変えられる」ということは素晴らしいことなのです。その意味で、確かに神様は私達に「そのままで良い、そのままであなたは赦され、受け入れられるのだ。そのまま私のところに来れば良い」と言われます。キリスト教は「神を信じたければあれをしろ、これをしろ」とは言いません、そのままで良いのです。しかし一方で神は、神を信じた者に「そのままそこに座り込んでいれば良い」とは言われない。「あなたは変わることが出来る。立ち上がることが出来る。それがあなたに様々な救いを経験させるのだ」と言われるのです。だから私達は、御言葉に向かうのです。

3: パリサイ人にまさる義について

イエスは最後に言われました。「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」(5:20)。確かに、律法学者やパリサイ人は、自分達の作った「律法」の細則に縛られ、細則を守ることに汲々としていました。しかし、それでもそれは、「神の『律法』」を守ろうとする熱心から出ていたことです。彼らは、「律法」を熱心に研究し、「義—(神との正しい、祝福の関係)」を得るために命を懸けていたと言っても良いでしょう。そのような彼らの「義」にまさる「義」が、熱心が、私達にあるのでしょうか。

しかし、この「義—(神との正しい、祝福の関係)」を考える時に大事なことをイエス様が教えて下さっています。それが「パリサイ人と取税人の譬え」というイエス様の譬え話です。「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。『ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。「神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでく

ださい」。あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです』」(ルカ 18:9~14)。パリサイ人の「義」、確かに彼らは「律法」を守ったかも知れない。しかし、守れば守るほど、そこに出て来るのは傲慢だった。守れない者に対する軽蔑と裁きだったのです。それは「聖書」の精神ではありません。しかも彼らは、「律法」を守っていると言いながら、神の精神を守っていない。守れないのです。その時、どうすれば良いのか。遜って悔い改めることです。

私達もそうです。私達には罪があります。罪が「神の民」として生きて行こうとする私達を邪魔します。苦しめます。その時は、悔い改めるのです。取税人は、神の前に何も差し出すことが出来なかった。ただ胸を打ちたたいて「こんな罪人の私をあわれんで下さい」と言うだけだった。しかしイエスは言われました。「義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのパリサイ人ではない」(ルカ 18:14)。なぜでしょうか。神に祝される「義—(神との関係)」は、律法学者やパリサイ人の考えていた「義」ではないということです。彼らの「義」は、「天の御国—(神の国、神との祝された関係)」を生きて行く生き方」ではないのです。大切なのは、神の前に立派に生きられない罪を認めて、悔い改める、その柔らかい心です。それこそ律法学者やパリサイ人にまさる「義」です。

三浦綾子の「我弱ければ」の主人公、矢嶋楯子はこう言っています。「私に洗礼を授けて下さったタムソン先生は…こう言われました。『キリストは、あなたの罪をことごとくその背に負って十字架につかれたのです…あなたは、ただそのことを心から感謝し、己が救い主はイエスであると心から信じれば救われるのです。救われるためには、いささかの行為も必要としません…決して人間は、自分自身の行為によって嘉せられ、信徒となるものではありません』…タムソン先生はこれが福音だと言われました…これほどの大きな罪も、信じるだけで赦して下さるとの神の約束を信じて私は喜んで信じたのです」(矢嶋楯子)。この柔らかさです。そして、悔い改めつつ、神が置いて下さった十字架を見上げ、感謝する時、私達も、律法学者やパリサイ人にまさる「義」を生きることが、きっと出来るのです。

さらに、私達には励ましがあります。イエス様の十字架と復活の後、神を信じる者に「神の霊—(聖霊)」が下るようになったということです。「『山上の説教』は、聖霊の助けを前提として書かれている」と言われます。聖霊が、私達の巡礼の旅を助けて下さるのです。